

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 28 日現在

機関番号：35306
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2012～2014
 課題番号：24520485
 研究課題名(和文) ネパールのメチェ語の文法記述分析・ドキュメンテーションとボド語西部方言の調査研究

 研究課題名(英文) Grammatical description, analysis and documentation of Meche and research into Western Bodo dialects

 研究代表者
 桐生 和幸 (Kiryu, Kazuyuki)

 美作大学・生活科学部・教授

 研究者番号：30310824

 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、メチェ語の言語データを言語ドキュメンテーションという観点から作成を行った。その結果、3年間を通じて26編のデータを収集し、テキストデータベース、ELANおよびToolboxによるデータベースの構築を行った。また、2012年に発刊したMeche-Nepali-English Dictionaryのデータを例文を中心に充実させ、オンラインで検索可能なシステムとして公開した。得られたデータを基に、文法的な観点からアスペクト、他動性、格標示について新たに分析を行い、論文あるいは、口頭発表によって成果を公表した。西ベンガル方言との比較および声調については分析を進めている。

研究成果の概要(英文)：I have conducted the current research from the view point of linguistic documentation. I have collected and complied 26 pieces of linguistic data in audio and video, compiling them into text database and digital database on ELAN and Toolbox. At the same time, I have extended the entries and examples in the 2012 version of Meche-Nepal-English Dictionary and constructed an online-searchable dictionary, which is open to public now. Based on the linguistic data in the research, I focused on three grammatical categories: aspect, transitivity and case-marking, and I presented the result of my analyses in the form of oral presentations and papers. The comparison between the West Bengal varieties and Meche and the analysis of tone in Meche are still on-going.

研究分野：言語学、チベット=ビルマ諸語記述研究、対照言語学

キーワード：メチェ語 言語ドキュメンテーション 文法分析 文法記述

1. 研究開始当初の背景

本研究者は、インドと国境を接する東ネパールのジャパ群で話されているメチェ語 (Meche) の研究を 2004 年より行ってきた。ネパールのメチェ語は、本研究者が本格的な研究をするまで、体系的な言語学的な研究が行われていなかった。桐生(2004)で簡単な文法素描を試み、その後、科研費による調査の結果を文法、語彙、テキストの3つを含む報告書としてまとめた (Kiryu 2008)。また、メチェ語を西ベンガル州で話されているボド語とかなり近い方言として、両者を西部ボド語方言とし、アッサム州のボド語を東部方言とし、ボド語群の下位区分を行った (Kiryu 2012)。

ネパールのメチェ語についての研究は、現在もっぱら本研究者のみが行っている。平成 21 年度から 23 年度までの 3 年間の期間で、メチェ語の再活性化に向けた記述研究とともに、正書法の制定、紙芝居を用いた母語意識向上活動の試みを行って来た。メチェ語はその存亡が危惧される危機的言語のひとつであることから、今後も包括的な調査記述研究が必要であった。

2. 研究の目的

本研究は、本研究によるこれまでの研究をさらに発展させるものである。第一にこれまで手を付けていなかった文化人類学的、社会学的なテーマのテキストを蒐集し、メチェ語の文法体系記述をより精緻化し、包括的なメチェ語文法書の草稿資料とする。メチェ族についての文化的側面の記述は、ネパール民俗学協会の出版物、および、Meche (2011) があるが、いずれもネパール語で記述されたものであり、メチェ語自体でその生活の体系が記述されたものではない。危機言語であるメチェ語の再活性化を考えた場合、社会文化的な事象を母語で記述した情報が不可欠である。そのような、資料を整備するだけでなく、その資料を分析する。

第 2 に Kiryu 2008 で提案した方言区分に基づき、メチェ語を含むネパールと西ベンガル州の諸変種の比較対照研究をさらに発展させ、ボド語西部方言の全体像を明らかにし、チベット=ビルマ諸語の研究に寄与するものである。

3. 研究の方法

(1) 言語ドキュメンテーションでは、言語の資料をできるだけ多く集め、メタデータを付したデジタルアーカイブを作成する。これにより、危機的な状況の言語の言語再活性化の役に立つのみならず、ありのままの言語活動を記録することで、より生き生きとした民族誌の記録が可能である。本研究では、言語データを音声だけでなく、ビデオでも収集し、ELAN というアノテーションソフトを用いてテキスト分析の基礎を作り、Toolbox というテキスト分析ソフトと連携して、データベース

を作成する。

(2) 得られた言語データを分析し、そこから特徴的な言語事実を抽出し、エリシテーションにより、より深く言語事実の解明を進める。
(3) ネパールおよび西ベンガル州の変種との違いを、語彙や文法を対照することで記述を行う。

4. 研究成果

(1) 本研究の主たる目的である、言語ドキュメンテーションに関しては、3 年間を通じてメチェの社会についての資料 5 編 (司祭による薬草調合、メチェの建築構成 2 編、タブーについて、子供時代の遊び)、メチェの歴史 1 編、個人インタビュー 13 編、結婚について 3 編、物語 4 編を新たに記録した。これらのデータは、インタビューの 10 本以外現時点でほぼすべて書き起こしを終え、テキストデータベース、および、ELAN および Toolbox によるデータベースへの構築を進めている。今後、デジタルアーカイブとして公開を進める予定である。

(2) 2012 年に制作した Meche-Nepali-English Dictionary 辞書のデータを例文を中心にさらに充実させ、Fess という仕組みを用いた全文検索が可能なる形に変換しオンラインで公開した。本検索ツールでは、各項目を HTML に変換し、そのデータをインデックス化し、メチェ語、ネパール語、英語のいずれかで検索が可能である。今後も、ドキュメンテーションで得られたデータの整備を進めながら、語彙項目を増やすとともに、例文や定義の改定を進めていく。

(3) アスペクト表現について、23 年度までにデータベース化したデータを基に分析を初年度当初に進めた。特に、メチェ語の存在動詞 *doŋ* が文法化したアスペクト形式 *doŋ* の分析を行い、学会において発表した。メチェ語の動詞は、テンス・アスペクト・否定が融合した接尾辞として表 1 のように現れ、*doŋ* はそのパラダイムの一つとして現れる。

表 1: メチェ語動詞のパラダイム

意味	語尾	例
習慣相	-ə	taŋ-ə 行く
非過去否定	-a	taŋ-a 行かない
未来肯定	-nai	-taŋ-nai 行く
過去肯定	-aʔ	taŋ-aʔ 行った
過去否定	-yi	taŋ-yi 行かなかった
継続相・パーフェクト	-dəŋ	taŋ-dəŋ 行っている
完了	-bai	taŋ-bai 行った
完了否定	-akəi	taŋ-akəi 行っていない

dəŋ は、存在動詞 *doŋ* およびコピュラ *dəŋ* 以外の動詞に接続可能で、動作継続、結果継続、パーフェクトの意味を表すことができることがわかった。例えば、*taŋ-dəŋ* は、行く途中でも、行った後の結果状態でも、過去に行っ

たことがあるという経験パーフェクト、すでに行っている、という意味の動作パーフェクトを表すことができる。この点、日本語のテイル形式と類似しており、対照的な観点から他の言語との比較も含めて論文を執筆し、投稿中である。

(4) 他動性に関連し、メチェ語の自動詞他動詞の調査を行った。基になるデータは、2012年に作成した辞書データで、すべての動詞834語を抽出し、それらのうち2項動詞について使役化のパタンを Haspelmath (1993)の分類に基づき整理した。すべての動詞の意味ごとの自他ペアについて、インフォーマントに作例などで確認し、メチェ語では自他の派生方向として、使役化、両極化、自他両用、補充形式の4通りが認められ、反使役化がないことが分かった。また、使役化が8割強と圧倒的に多く、そのパタンについては、初頭子音交替(例: bai?/pai? 「折れる/折る」)、使役接頭辞 pV-(Vは、調和母音)の付加(例: jəb/pəjəb 「終わる/終える」)、子音交替と接頭辞付加の組み合わせ(例: ji/pici 「破れる/破る」)、使役接尾辞-həの付加の操作(例: undu/undu-hə 「寝る/寝かす」)が認められた。成果は、書籍収録の論文として発表した。

(5) 前述の他動性の調査からメチェ語における格標示について、その特徴が明らかになった。これまで、メチェ語の格は主格・対格型の格標示体系を持ち、主格は=a、対格は=kəuが明示的なマーカーとしてあり、これらは、義務的な表示を受けず、文脈によって付くかつかないかが決まると結論付けていた(桐生2012の論文)。自動詞文については、その標示が文脈に左右されるが、他動詞文については、文脈よりも主語と目的語の animacy の違いによって、義務的に表示されることが分かった。格標示にかかわる名詞句階層として 1st/2nd pronoun > human > non-human animate > inanimate という階層に基づき、代名詞は必ず対格表示を受ける、普通名詞の場合は、主語 > 目的語の場合、格標示は文脈に左右され、主語 = 目的語の場合は、両方が義務的、主語が human、目的語が non-human animate の場合は、主語の標示が義務的、主語 < 目的語の場合は、両方が必ず表示されるということが分かった。以上のことは、学会において発表を行った。

(6)メチェ語の近親語であるボド語では、高低対立による声調の違いがあると報告されている。メチェ語では、Kiryu (2008)の文法素描で同様の違いを報告した。しかし、さらに詳しく調査を進めた結果、メチェ語では、声門閉鎖音の存在が高ピッチアクセントに関係し、また、アクセント自体が現れる位置は、語単位ではなく、句単位で現れることが分かった。この点については、さらに分析を進めているところである。

(7)西ベンガル州の変種とネパールの変種の比較については、2014年度に西ベンガル州ハシマラ村を訪れ、調査を行った。ここでは、文法的な点に着目し、対象名詞に現れる -kəu の分布の違い、および、自動詞・他動詞の表現の違いについて調査を行った。その結果、ネパールの変種との違いが認められなかった。

3年間を通じて、以上のような成果を得た。ドキュメンテーションを主たる中心に据えているため、その書き起こしおよびデータベース化に大部分の時間が費やされた。しかし、今後の言語分析に向けた基礎データが整備できたので、得られたデータを基に包括的な文法書の執筆を進めている。

<引用文献>

- Haspelmath, Martin (1993) More on the typology of inchoative/causative alternations. In: Bernard Comrie and Maria Polinsky (eds.) *Causatives and transitivity*, 87-120. Amsterdam: John Benjamins.
- 桐生和幸 (2004) 「メチェ語調査ノート」 美作大学・美作大学短期大学部紀要 49号:31-39.
- Kiryu, Kazuyuki (2008) *An outline of the Meche language: grammar, text and glossary*. Mimasaka University.
- Kiryu, Kazuyuki (2012) The Western Bodo dialects in Nepal and West Bengal, 美作大学・美作大学短期大学部紀要 57号:9-18.
- Meche, S. L. (2011) *Meche Itihāsa ra Samṣkr̥ti (The Meche History and Culture)*. Bāgabājār: Āḍiyala Dījāinārsa.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1件)

[学会発表](計 2件)

KIRYU Kazuyuki: The semantics of the existential verb as an aspectual marker in Meche, 18th Himalayan Languages Symposium, Baranas Hindu University, 2012.

KIRYU Kazuyuki: Case-marking and animacy hierarchy in Meche (Bodo), 20th Himalayan Languages Symposium, Nanyang Technological Institute, Singapore, 2014.

[図書](計 1件)

プラシャント・パルデシ、ハイコ・ナロック、桐生和幸編、くろしお出版、『有対動詞の通言語的研究：日本語と諸言語の対照から見えてく

るもの』所収 桐生和幸「メチエ語使役動詞の形態的特徴」, pp. 2015.

〔産業財産権〕
出願状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
<http://wamakidoujiten.mimasaka.jp/kiryu/meche/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

桐生 和幸 (KIRYU, Kazuyuki)
美作大学・生活科学部・教授
研究者番号：30310824

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：